

P1-47-1 血中ケモカイン測定による早期産予知に関する検討

東大阪市立総合病院

西澤美嶺, 奥 正孝, 宇山圭子, 前原将男, 中西隆司, 斎藤仁美, 小川 恵

【目的】絨毛膜羊膜炎は早産の主な原因であり、局所における癌胎児性フィブロネクチン、好中球エラスターゼの定量が経過判定に用いられているが、無症候症例における陽性率が高いため早産予知因子としての評価は得られていない。今回、CXC ケモカインである IL-8 ならびに CC ケモカインの MCP-1, RANTES を妊娠中期に測定することにより、無症候症例における早産の予知が可能であるか否かを検討した。【方法】合併症を有しない当院受診妊婦を対象に、倫理規定に従い文章による同意のもと、妊娠 24~26 週に血漿中 IL-8, MCP-1, RANTES を EIA 方により測定した。【成績】評価可能な 62 例中 3 例が早期産に至った。IL-8 は全ての症例で cut off 以下であった。RANTES は、正常産群では平均 30120 であるのに対し、早期産群では 26930 と低値を示したが、両群に有意差は認められなかった ($p=0.7909$)。一方 MCP-1 は、正常産群の平均値が 77.1 であるのに対し、早期産群では 215.5 と高値を示し、両群間に有意差が認められた ($p<0.0001$)。早産に至った個別症例を検討した結果、MCP-1 が 413 と著明な高値を示した症例は、測定の 2 週後より PIH を発症し、妊娠 31 週で児発育停止、PIH 増悪により緊急帝王切開となった。MCP-1 が 171 で 35 週に早産となった症例は、その後妊娠 12 週で自然死産、さらに次回妊娠時においても 35 週 6 日に常位胎盤早期剝離で分娩となった。【結論】MCP-1 は単球系細胞の走化因子、活性因子として知られているケモカインであるが、今回の検討により IL-8, RANTES とは挙動を異にし、早期産の予知因子となりうる可能性が示唆された。

P1-47-2 切迫早産長期入院既往妊婦に対する予防的頸管縫縮術の有用性

伊集院病院¹, 伊集院産婦人科西田²今村昭一¹, 伊集院雅子¹, 深町信之¹, 塩川宏信¹, 釜付眞一¹, 伊集院吐夢¹, 伊集院康熙¹, 福元清吾²

【目的】前回切迫早産で長期入院し満期産となった妊婦に対して、今回の妊娠において長期入院を予防するための取り扱いについては一定した見解もなく、それらに関する報告もほとんど見られない。当院では頸管炎を原因としない頸管長短縮を伴った長期入院既往妊婦に対して、今回の妊娠では積極的に予防的頸管縫縮術を施行しているためその有用性について検討した。【方法】頸管長短縮を伴う 1 ヶ月以上の切迫早産長期入院既往を持つ妊婦で、2007 年 1 月から 2010 年 12 月までに予防的頸管縫縮術を施行した 32 例を対象とした。後期流産または早産を理由に今回頸管縫縮術を施行した症例は除外した。前回と今回の妊娠で切迫早産の治療成績を比較した。【成績】切迫早産入院例は、前回の 32 例から今回は 5 例へ有意 ($P<0.0005$) に減少した。塩酸リトドリン点滴例も、前回の 32 例から今回は 5 例へ有意 ($P<0.0005$) に減少した。硫酸マグネシウム点滴例も、前回の 8 例から今回は 1 例へ有意 ($P<0.05$) に減少した。切迫早産入院日数は、前回の 58.2 ± 19.8 日 ($N=32$) から今回は 20.2 ± 14.5 日 ($N=5$) へ有意 ($P<0.0005$) に減少した。塩酸リトドリン点滴日数も、前回の 52.4 ± 19.8 日 ($N=32$) から今回は 15.0 ± 7.9 日 ($N=5$) へ有意 ($P<0.0005$) に減少した。硫酸マグネシウム点滴日数も、前回の 28.9 ± 12.8 日 ($N=8$) から今回は 19.0 ± 0 日 ($N=1$) へ減少傾向を認めた。35 週未満の早産が 2 例見られたが、1 例は胎児機能不全によるもの、もう 1 例は子宮腺筋症合併によるもので、頸管縫縮術を原因とするものではなかった。【結論】頸管炎を原因としない頸管長短縮を伴う長期入院既往妊婦に対する予防的頸管縫縮術は、切迫早産管理に有用な方法であると思われる。

P1-47-3 胎胞膨隆症例に対する緊急頸管縫縮術後の tocolysis の必要性について

帝京大ちば総合医療センター

宮下真理子, 古村絢子, 寺田光二郎, 長坂貴顕, 中村泰昭, 落合尚美, 中川圭介, 矢部慎一郎, 五十嵐敏雄, 梁 善光

【目的】当科では妊娠 22 週未満の胎胞膨隆症例に対して、当院で取り扱うことができる妊娠 32 週以降までの妊娠期間延長を目的に緊急頸管縫縮術を施行している。過去 9 年に 4 例を経験し、今回後方視的に調査し、特に術後 long tocolysis の必要性の有無に関して検討を加えた。【方法】平成 14 年 4 月~平成 23 年 3 月までに当科で施行した頸管縫縮術症例は 108 例であり、このうち 4 例が胎胞膨隆症例である。胎胞の還納には膀胱充満法とバルーン圧排法のいずれか又は両者を併用し、頸管縫縮術式としては McDonald 法を施行した後に Shirodkar 法を追加した。【成績】3 例 (症例 ABC) は妊娠 14 週 6 日~妊娠 16 週 0 日に手術を施行し、1 例 (症例 D) のみ妊娠 21 週 4 日の施行であった。膨隆した胎胞の大きさは 15~30mm であった。術後は全例塩酸リトドリン、硫酸マグネシウムによる tocolysis を施行した。うち一例 (A) は症状が安定した時点で中止したが、他の 3 例は最終的に分娩まで継続した。A は中止後 3 週間で再度胎胞膨隆し再手術を施行したが、再手術 6 週間後の 27 週で破水・分娩となった。B, C はいずれも tocolysis を継続したにもかかわらず、それぞれ 26 週, 31 週で破水→分娩となった。D は 35 週時に陣痛発来し分娩となった。平均妊娠延長期間は 93.5 日 (76~113 日) であった。【結論】胎胞膨隆症例の妊娠予後は一般的に不良とされるが、当科では当初の目的を完全には満たさないまでも、比較的良好な妊娠期間延長効果を得ることができた。海外の報告では tocolysis は術後 72 時間程度の short tocolysis が一般的とされる。症例数が少なく断定はできないが、今回の結果からは緊急頸管縫縮術後に long tocolysis を施行することの有用性が示唆された。